

### 1) はじめに

島畑とは水田開墾のために地面を掘下げた土砂を内側に盛り上げ、島状にした場所を畑として利用したものである。そのため、堀上田のような沼地ではない低地や用水を引くことが出来ない不便な場所に造られることが多いといえる。埼玉県では大宮台地縁辺部等で確認されている。宮代町では字東から字中、字金原に至る低地部の下ノ谷耕地を中心とする範囲で確認されている。

島畑は圃場整備や盛土により姿を消しつつあるといえる。宮代町でも昭和 30 年代から中央部の畑の土砂を運び出し、田地とする作業が頻繁に行われ、殆ど島畑は消えつつあるといえる。更に平成 18 年度以降には下ノ谷耕地周辺の低地部の盛土が進み、島畑が消滅しつつある。平成 20 年 2 月 27 日には字中で 1 基の島畑を確認し、写真撮影を行なったが、この度、発掘作業員森田富子氏から、実家近くに島畑が残っていると聞き、平成 23 年 8 月 2 日に字東 44-1、41-1 付近で 3 基の島畑を確認し、写真撮影を行なった。

なお、今回の報告の後に中地区で確認された島畑についての報告も掲載する。

### 2) 下ノ谷耕地と島畑

字東・字中の台地周囲の低地や隼人堀川の南側の低地は、かつて下ノ谷新田と呼ばれ、大宮台地縁辺部で典型的な島畑が見られた。この島畑を地元では、「タッチマ（田島）」と呼んでおり、島（畑）では里芋や小麦、陸稲等を、田では摘田（ツミタ）を行っていた。この新田を地元では、谷新田（ヤシンデン）と呼んでおり、昭和 20 年までは用水がなく天水場であった。

### 3) 今回の調査

平成 23 年 8 月 2 日に発掘作業員森田富子氏に字東に島畑があるとの情報を聞き、写真撮影を行なった。3 基の島畑が列状に並んでいた。3 つの島畑を仮に北側島畑、中央島畑、南側島畑と仮称し説明したいと思う。

北側島畑は最も大きく、田圃の中にある畦道を通り北側島畑に至る。水田面より 40cm 高くなっており、畑では農作物が植えられている。北側島畑の北側は、以前は田圃であったが、現状は畑となっており、北側島畑は東地区の台地縁部から南側に突き出した形状をしている。規模は長径 18m、短径 12m を測る。

中央島畑は北側島畑より若干小規模な島畑である。水田面より 50cm 程高くなっており、周囲の水田より一際高く見える。畑では農作物が植えられている。規模は長径 13m、短径 12m を測る。道から中央島畑へは専用の畦道が造られている。また、中央島畑から南側島畑に至る畦道も残されており、島畑とは単に水田の中に畑があるというわけではなく、道

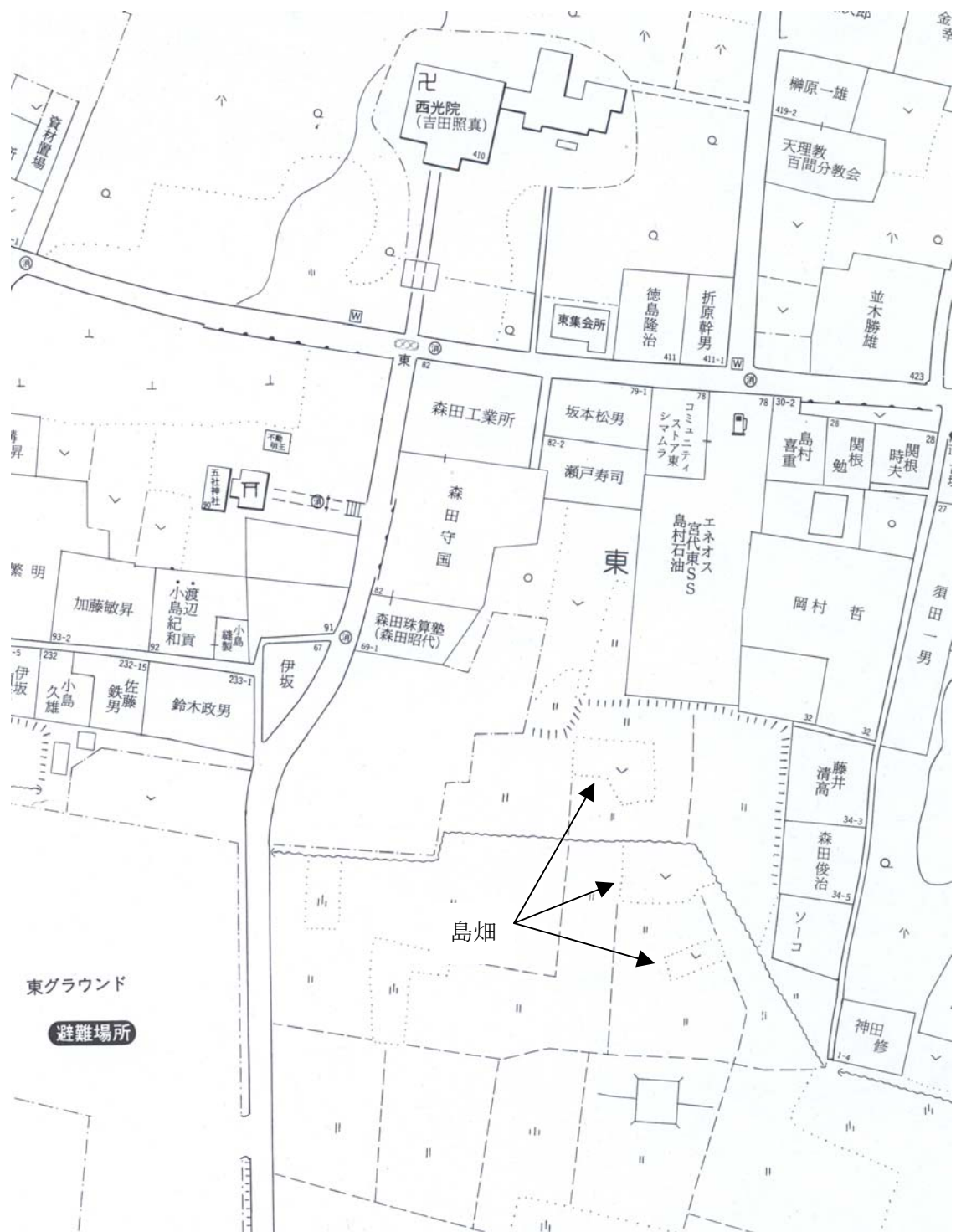
から島畑、島畑から島畑へと畦道網が張り巡らされていたことが分かる。

南側島畑は周囲より 30～40cm 高いが、他の 2 つの島畑よりは低く見える。また、規模も小さく、長径 15m、短径 4m を測る。この島畑は水はけが悪いため、畑では里芋しか収穫できないという。今回の調査でも里芋が植え付けられているのを確認した。

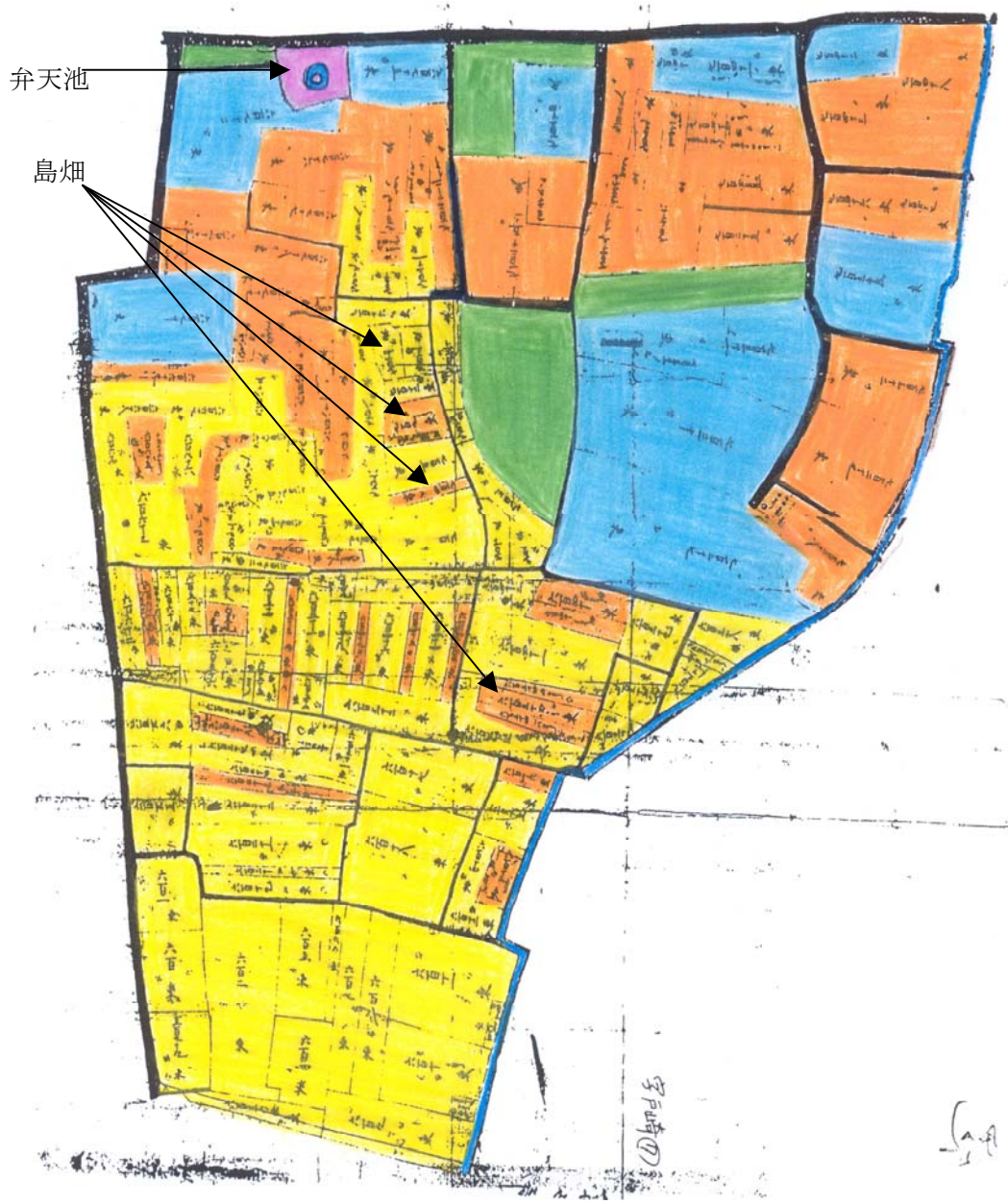
過去には 25 年ほど前まで鉄塔南東側にも規模は小さいが高さは最も高い島畑が存在したという。昭和 51 年の地形図によると、長径 15m、短径 6m を水田面より 60～70cm を測り、高さは周囲の水田面より 80～90cm 高かったようである。

島畑は、昭和 51 年の地形図では、本地点を除きほぼ確認できない状況であったが、かつては、水田の中に多数の島が浮かぶ状態であったと推定され、上空から見ると水中もしくは稲穂の中に島が浮かび、その島間を結ぶ畦道網を含め、美しい景観が広がっていたと推定される。

下ノ谷新田の島畑は、笠原沼新田の堀上田と共に宮代町を代表する素晴らしい田園風景と言えるだろう。是非とも後世に残していきたい農村空間である。

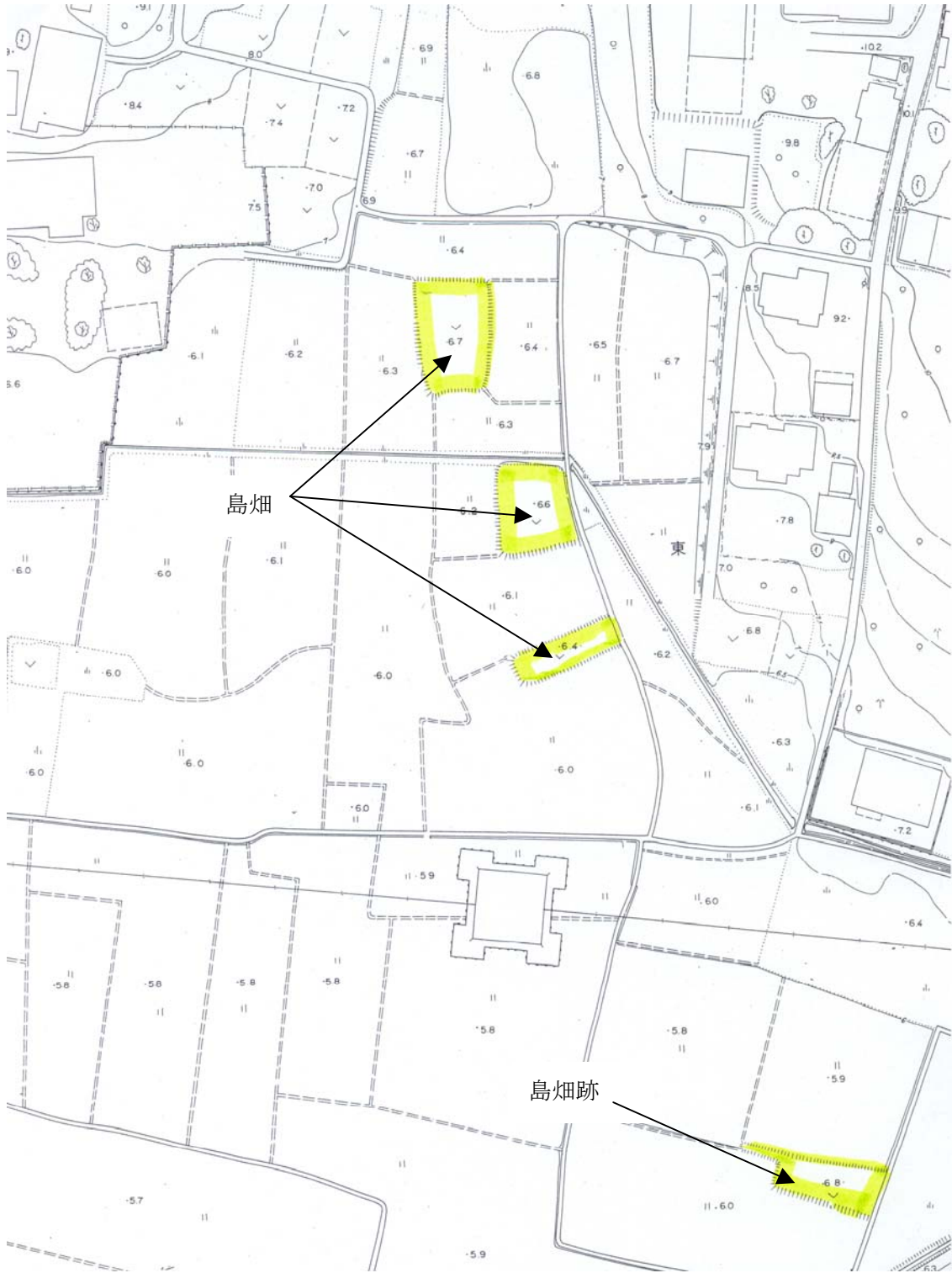


平成 14 年の地形図



明治 10 年の宇戸崎の地籍図

黄色 = 田圃 茶 = 畑 水色 = 宅地 青 = 水路 黒 = 道 ピンク = 寺社地



昭和 51 年の地形図





島畑全景 東側から



島畑全景 南側から



島畑全景 北側から



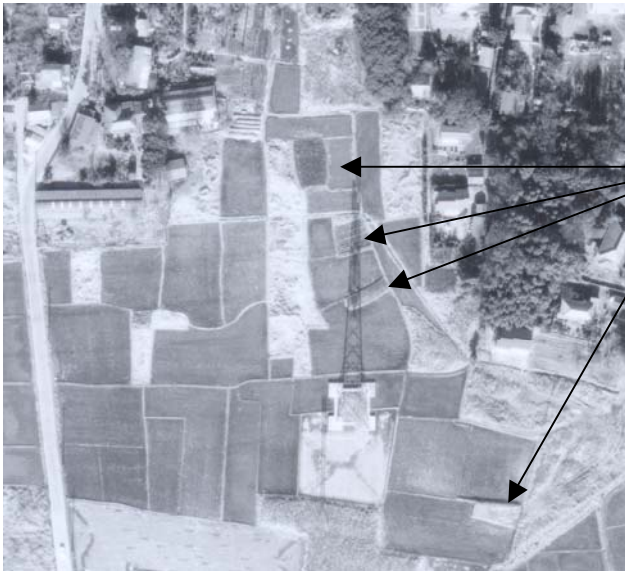
北側島畑



中央島畑



南側島畑



島畑

昭和 50 年 航空写真



島畑

平成 13 年 航空写真



中地区に残る島畑について

宮代町教育委員会 河井伸一

### 1) 島畑とは

島畑とは水田開墾のために地面を掘下げた土砂を内側に盛り上げ、島状にした場所を畑として利用したものである。そのため、堀上田のような沼地ではない低地や用水を引くことが出来ない不便な場所に造られることが多いといえる。埼玉県では大宮台地縁辺部等で確認されている。宮代町では字東から字中、字金原に至る低地部の下ノ谷耕地を中心とする範囲で確認されている。

島畑は圃場整備や盛土により姿を消しつつあるといえる。宮代町でも昭和 30 年代から中央部の畑の土砂を運び出し、田地とする作業が頻繁に行われ、殆ど島畑は消えつつあるといえる。更に平成 18 年度以降には下ノ谷耕地周辺の低地部の盛土が進み、島畑が消滅することとなった。

このような中、平成 20 年 2 月 27 日、字中の横溝東氏宅で民具の寄贈を受けた際、僅かに島畑が残っているとの情報を聞き、調査を行ったものである。

### 2) 下ノ谷耕地と島畑、摘み田

字金原・字中の台地周囲の低地や隼人堀川の南側の低地は、かつて下ノ谷新田と呼ばれ、大宮台地縁辺部で典型的な島畑が見られた。この島畑を地元では、「タッチマ（田島）」と呼んでおり、島（畑）では里芋や小麦、陸稲等を、田では摘田（ツミタ）を行っていた。この新田を地元では、谷新田（ヤシンデン）と呼んでおり、昭和 20 年までは用水がなく天水場であった。

### 3) 下ノ谷新田の歴史

この新田は、享保 9 年（1724）に開発され、下ノ谷百間東村・下ノ谷百間西村新田・下ノ谷百間西原組新田・下ノ谷百間金谷原組新田で構成されており、いずれも、それぞれの本村の持添新田であった。全ての下ノ谷新田の村は終始幕領に属していた。

なお、下ノ谷新田内を流れる隼人堀川は、江戸時代初期、岩槻藩主であった阿部備中守正次により開削されたと推定され、元禄 6 年（1693）の折原静佑家文書「騎西領落堀堰論裁許状」（折原家文書No.948）にも「備中堀」と記される。その後、明治となり、下ノ谷新田は大字百間東小字下ノ谷、大字百間中小字下ノ谷、大字百間西原組小字下ノ谷、大字百間金谷原組小字下ノ谷となったが、昭和 5 年の大字小字廃止に伴い、字東、字中、字金原となった。

昭和 19 年頃には下ノ谷耕地の揚水灌漑事業を行った。戦中の人手不足の際には、青山高等師範学校（現在の東京学芸大学）の学生の勤労奉仕等により昭和 20 年 7 月 7 日に完成した。平成 8～11 年度に実施された金原遺跡の発掘調査でも、この時、掘られた灌漑水路の

跡が検出されている。

#### 4) 島畑、摘み田の終焉

この灌漑用水工事により、下ノ谷耕地では、隼人堀からポンプで用水を引き入れることが出来るようになったため、天水場ではなくなった。そのため、摘み田を止め、植田になったという。なお、昭和 30 年代までは摘み田を行う農民がいたようである。その後、より田地を増やし稲作面積を広げるため、畑である島畑中央部の土砂の排出が行われ、島畑は少なくなり田地が多くなった。こうして、島畑や摘み田は焼失していった。

#### 5) 今回の調査

平成 19 年 6 月 20 日に字中の横溝東氏宅に民具を受け取りに行った際、島畑が残っているとの情報を受け、奥様の横溝シズ子氏に案内してもらい調査を行った。更に平成 20 年 2 月 27 日に再度調査を行ったものである。田んぼの中に高さ 50 cm、大きさ 10m×3mの島状の土盛りを確認した。周囲にはこのような島畑はなく、1 基を残し消失したと考えられる。調査時には畑部分で作物の植付けは既に行われなくなっていた。

